



中舞鶴の歴史・くらし探検隊 活動ニュース

第2号

発行 平成27年7月20日

編集 中央公民館

舞鶴市字余部下1167

初回の探検は、余部上地区

“新たな発見、が続々
榎川の石組み、鎮魂碑など

活動ニュースを自治会回覧

6月12日に発足した「中舞鶴の歴史・くらし探検隊」（27年度の中公民館事業）。6月28日に初のまち探検を実施しました。中総合会館を出発、榎川に沿って余部上地区を聖徳寺へ、その後、国道を渡って若宮や奥母を探検。帰着後は次回の打ち合わせを行いました。今回の参加者は、申込者17人のうち9人。

次回のまち探検は余部下～長浜地区を予定しています。

探検隊の活動概要を「活動ニュース」として隊員の皆さんに配付するほか、中舞鶴地区で自治会回覧を行い多くの皆さんに見ていただきたいと考えています。

探検隊の活動の活動にご理解とご協力をお願いします。



▲探検スタート。初回は余部上地区（平成27年6月28日、中総合会館前）

探検隊の目標、活動計画

●ふるさと中舞鶴の歴史や生活文化に誇りを持ち、小学校の“校区探検”等で案内役となる人材を育てる。

●探検で明らかとなった地域資源や問題点を整理するなかで、地域課題の解決に取り組む人材の育成（地域力の強化）につなげる。

⇒活動のまとめ：探検成果を参加者が協力してパネル等にまとめ、中央公民館で展示（予定）

■参加者

▽公募の市民18人（うち中舞鶴地区在住は14人）
隊長：藤川、副隊長：川井、鈴木、庶務：柴田、
記録：河田、事務局：山口（中央公民館）

■当面の活動(予定)

講義形式ではなく、参加者の自主性を尊重した進め方とする。毎月第2火曜の夜に座学、月1回（日曜午前）のまち探検を中心に活動。

▽まち探検 7月19日、8月16日 9:00～12:00
行き先 … 長浜、和田、余部下等

▽座学 8月11日 19:00～21:00、中央公民館

【主催・問い合わせ先】

中央公民館（電話62-0400）

探検隊アンケートから(27年6月28日)

■今後の探検に期待すること、改善すべきことなど
▽探検の移動時間を短縮するため、車での移動を検討すべき。

▽光秀稲荷が今の場所に設置された経緯を知りたい。

■その他自由意見

▽主となるテーマを持つこと。

▽普段何気なく見ているところを改めて発見できて楽しかったです。

▽道中で出会った人、途中からでも参加していただける人（詳しい人）があれば、参加してもらってもいいのではないかと。築200年の話にはびっくりしました。

榎川の謎…



▲榎川の石積み。海軍の舞鶴鎮守府設置に伴い、川の付け替えが行われた。川底にも花崗岩の石積みが施されている（探検当日は、「榎川を美しくする会」の一斉清掃活動が行われていた）



築2百年近い榎川上の瀬野さん宅。殿様が通る道に面していたことから、2階に窓を設けていない。かつての榎川は、今と反対の家の裏側（西側）を流れていたそうだ。



▲さくらんぼ園付近では、榎川が直角に曲がり、川の付け替えがおこなわれたことが実感できる



▲榎川の様子を見る瀬野隊員



▲生き物の生息環境に配慮された整備が行われた榎川



榎川の地名の由来になったのか？ エノキの大木の切り株。アスファルトを隆起させ、電線を抱えた枝の残骸が残る

門柱の再活用…



▲旧憲兵分隊の施設跡が公園の柵に再利用されている



▲交番の門柱は当時のもの



現在の中舞鶴交番付近

慰霊の碑… (眞宗寺)

舞鶴鎮守府設置の大工事で犠牲となった人々を慰霊する鎮魂碑（眞宗寺境内に隣接）。舞鶴出身の海軍中将男爵・伊藤雋吉（いとうとしよし、1840～1921年）が揮毫している（写真右）



▲碑文を読む？探検隊員

奉納…

若宮神社には、日清戦争で活躍した水雷艇の、被弾された砲の外板が奉納されている



奉納
明治三十七年（1904年）日清戦後
威海衛の海戦にて
敵弾を数十個受
けられた水雷艇の
外板一部

様々な発見が…



聖徳寺の山門をくぐると、立派で形のよい大木（タブノキ=写真右に出会う。ここにも海軍由来の石塔が。



小林長右衛門とは誰なのか？
（若宮大師堂の隣に建つ）



絶景かな～。明教寺境内の墓地からの眺望（写真上）。

明智光秀…

明智光秀を祭る光秀稲荷社。現在の場所に移転されたのは近代になってからのこと。



立派な民家…

風格のある、奥母の井上家(写真右)と瀬野家(同下)。



瀬野家の蔵に取り付けられた鐘馗(しょうぎ)像？



うだつ(税)のある民家



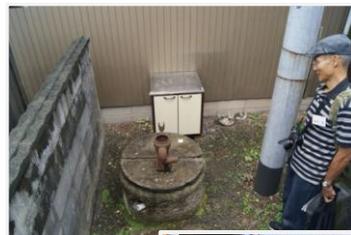
空き家を活用した奥母老人クラブの交流スペース



「舞鶴ハウス」はかつての飯野家のゲストハウス

【お断り】掲載内容については、今後の探検活動の中で、追記・修正等を行う予定です。活動成果は後日、中央公民館での展示を計画しています。

井戸と防火用水



今も残る井戸。水があるところに生活あり(上は奥母、右は中町4丁目)



戦中に各家庭に配備された防火用水槽(さかさまに置かれている)。左側には市の境界柱

中舞鶴の地名を考える

餘部の古代 その①～

探検隊員に日本の地名に詳しい方、井本精一さん(長浜)がいらっしゃいます。中舞鶴の地名の由来を連載で紹介していただきます。

ご存知の如く、舞鶴には出土した遺跡や考古物から縄文中期から後期にかけてすでに人間が生活していた痕跡が認められる。この人達は当然どこから渡来してきた訳であるが、それを探る手掛かりが「地名」なのである。

自分たちが何者なのかを周囲の人たちに知らせる事が、当時の社会情勢の中では何よりも重要な意味を持っていたのである。

◇縄文時代は日本列島にはまだ移住者は少なく、部族間の争いも余りなかったので地名を付ける必要性も無かったのかも知れない。せいぜい自分たちがどこから来たかを地名に刻印しておけばよかった。

例えば、「雁又」は沖縄にもあるが、いまのカリマンタン島(旧ボルネオ島)から来たことを表し、佐波賀は同じ島にあるサバから渡来したと思われる。ついでに指摘すると丹後半島の、「間人」はTA-AZI→TA-IZA でエジプトからの渡来である。(注 アジとは煙りのことでシュメール人はエジプト人のことを煙の人と呼んだのである)◇弥生時代に入ると大陸からの渡来者が急激に増え、倭国全体が戦闘態勢に突入した。これは一重に大陸情勢によるもので、秦の中国統一により惹起されたものであった。この時代の大陸では、以下の5族による攻防が繰り返されていた。すなわち、馬族、牛族、犬族、鳥族、蛇族の5族である。これら5部族がそれぞれの事情で日本列島に流入してきた。従って新天地に渡ってきた彼らにとってまず必要だったのは、食料の確保と自分たちの集団の特性を表す表札、つまり地名だったのである。この時代は、自分たちは何をもって神聖なものとして崇めるかが、最重要案件だったのである。よって、彼等移住者の部族名をそのトータルで地名に刻印する必要があったのである。(井本精一)